

# 沖縄系人における多層的スタンダード形成をめぐる問題

—来日・来沖ウチナンチュ系ブラジル人ディアスポラの比較研究—

田 島 久 歳

## The construction of a cultural multiple-standard of Okinawan-Brazilians:

A comparative study based on the cases in Mainland Japan and Okinawa

Hisatoshi Tajima

The main purpose of this paper is to analyze the transformation of Okinawan Brazilians that came to Mainland Japan and Okinawa in the 1970s and had been integrated into these host societies after experiencing a series of self-conflict in the process of building up a new identity. The second aim is to demonstrate, through a comparative analysis of both groups, the process of building a parallel socio-cultural multiple-standard, Brazilian and Japanese or Okinawan, after more than 10 years residence in the respective host societies. Finally, the author raises the question of cultural transmission to young generations.

The author hopes that this analysis as well as the cases discussed in this paper can help increase Japanese public opinion and arouse discussion concerning the integration of minority groups into the Japanese society.

### はじめに

本稿で扱うのは、1950年代に沖縄からブラジルやボリビアに移民として渡り、その後、1970年代に来日・来沖したウチナンチュ系ブラジル

人である。これらの日本本土に移住したウチナーンチュ系ブラジル人（以下、来日者と表記）、および沖縄に移住したウチナーンチュ系ブラジル人（以下、来沖者と表記）のライフストーリーの事例に基づき、異文化社会への適応方法としての多層的スタンダード形成と文化継承の問題について考察を試みる<sup>(注1)</sup>。

来沖者の調査は、2010年8月下旬の一週間、来日者に対しては関西において1993年8月から翌年3月までと、2011年1月上旬の一週間の二度にわたる参与観察とインタビュー形式で行った<sup>(注2)</sup>。沖縄や関西での現地調査は短期であるものの、筆者自身も1972年6月にブラジルから来日したバックグラウンドをもち、調査対象者との共通の生活経験をもってきている。そのため、古くからの知人・友人である多くのインフォーマントと接点を維持し、かれらの40年近い変遷を直接または間接的に観察してきた。このような筆者と調査対象者の関係性に基づいて、上記調査は行われた。

本稿でいう関西とは、大阪市大正区、兵庫県尼崎市園田、額田、戸ノ内、抗瀬、宝塚市といった地域を指す。来日者の親は、中小零細町工場が集中するこの関西地域に居をかまえ、その子の世代である来日者たちも多くが現在も同じ地域に住んでいる<sup>(注3)</sup>。

また、本稿の研究対象となる来日・来沖者は、1970年代当時の青年たちで、基本的には親の意志によって来日・来沖した。来日・来沖に際して婚姻関係を築いた者もあるが、大部分は独身であった。そして来日・来沖後に結婚して家族を形成し、現在では子どもが中学生以上のケースが多い。なかには子どもはすでに成人して結婚し、孫もいるケースもある。

## 1. 来日・来沖ウチナーンチュ系ブラジル人ディアスポラ概要

1970年代初頭のブラジルでは、国際的にも「ブラジルの奇跡」と称賛

される高度経済成長期の終わりにあたると同時に、社会・経済的格差が広がり、中間層が貧困化していく時期でもある。その経済・社会の趨勢は、後に「失われた10年」と称される1980年代の状況の前ぶれでもあった。ブラジル社会の中間層に属する大半の日系人やウチナンチュ系人はこうした経済・社会状況による打撃を受けた。それは、彼らにとって、受験の難関を突破して高等教育を受けさえすれば社会上昇できた時代の終焉を意味した。この社会上昇モデルの崩壊に伴い、日系人はそれに替わる方法を模索しはじめていた。しかし、ブラジル国内社会における不透明な未来への見切りをつけて、より良い生活の将来像を求めるために、一世が選択したのは、家族同伴での来日・来沖であった。

それは、1950年代に同じように沖縄での不安定な将来像に見切りをつけて、ブラジルの明るい未来に夢を託して移民した時とちょうど逆方向の移動をすることであった。

新たな生活の場を切り開くため、新天地を求めての来日・来沖は、移民船の就航が終了する1973年5月までは、ほとんどが船で一ヶ月半かけた地球半周の旅だった。その後は飛行機に取って代わった (Tajima 1999:193)。船旅のあいだに経験を共有することによって形成されたきずなは、来日・来沖後の生活にも大きな影響を及ぼした。

このような沖縄とブラジルの往復移動をして来日したにもかかわらず、来日間もない時期にブラジルに戻った者もいる。本稿の主な研究対象ではないが、このディアスポラの全体像を知る上で重要なケースを紹介したい (以下、紹介する人はすべて仮名)。

真栄城Tsの長男Tkは、10歳で沖縄からブラジルに渡った。その後、父母兄弟や新妻と一緒に22歳で1972年6月に来日した。来日を目前にして当時の婚約者との結婚を急いだ。

ブラジルでは1973年から新移民法が施行され、新制度では2年ごとに

連邦警察に出頭し、在住確認をしなければ移住者資格を失うことになった。そのため、ブラジルでの移住者資格を失う前にTkは妻と来日後に誕生した娘を連れて、叔父の真栄城Tmの家族と共にブラジルに帰った。彼らは、希望を胸に来日したわけだが、ブラジルで取得した運転免許以外はいかなる資格も通用せず、町工場の単純労働者やトラックの運転手として生計を立てた。結局、日本では将来の展望が開けないと考え、夢が託せるブラジルで生活することを選択した。その後、筆者がブラジルに幾度となく行く機会にはTkに会い、ライフヒストリー調査を行ってきた。Tkは、ブラジルに再渡航した後は仕事をしながら成人向け通信制高校を卒業し、夜間大学に進学して電気工学を学んだ。そしてスエーデン系大手電機会社に就職した。その後、転職してブラジルの大手銀行の電気通信管理部門の所長を務めた。現在はサントスの北部海岸ベルチオガでヴィラ風レジャー・ホテルを経営している。1974年初頭にブラジルに戻ってから生まれた2人の子どもを含めた3人の子どもは皆医師となり、数年前には長女が結婚して初孫が生まれた。

Tkの叔父のTmは、数年前に他界した。来日当時は妻と小学校低学年から幼稚園児年齢の子どもが3人いたが、甥であるTk家族とブラジルに戻り、来日する前の仕事であるフェイラ・リーブレ (feira livre 朝の露店市) でフェイランテ (feirante フェイラ・リーブレで商品を商う者) を続けて子どもたちを育てた<sup>(註4)</sup>。長男はブラジルで大学および大学院に進学し、現在は大学教員の職に就いている。他の子どもたちもホワイト・カラーとしてブラジル社会で活躍している。

上記ケース以外にも大里Kの四女のように20歳でブラジルに戻り、勉強を継続して、社会人となり、結婚して家族を形成し、現在はカンピナス市で生活している女性の事例など、一旦は日本に渡ったものの、その後ブラジルに舞い戻ったというケースはいくつかある<sup>(註5)</sup>。

こうした例において、ブラジルに戻った理由として、共通する語りがある。すなわち、日本での将来展望がひらけない、差別的扱いを受ける、日本社会やその構成員の世界観が狭小である、といったものである。いずれにしても、日本社会は「居心地が悪い」と感じたのである。ブラジルに帰った者のみならず、来日者の多くは、来日によって生活レベルが低下したと証言している。Tkの言を借りるならば日本では「ファヴェラ (favela, スラム街) に住んでいた」。また、来日者の大半は、ブラジルでは、親または本人がフェイラ・リーブレでフェイランテまたは、家内縫製業者をしていた者が多い。彼らは、独立した自営業者であった。したがって、フェイランテは自ら栽培する葉野菜をフェイラで販売するか、サンパウロのCEASA (サンパウロ中央卸売市場) で購入する生鮮食品を売る。フェイランテ自らが自己責任で生活する生業のスタイルはきわめて自由度が高い。ところが来日することにより、町工場という企業の従業員となる。企業の労働時間に拘束される新たなライフ・スタイルにおいて生活レベルが低下したという閉塞感が生まれるのも無理はない。

来日者・来沖者は、拡大家族 (夫婦、親、子ども) を社会生活の基本的単位と考え、自らの存在とは不可分であると捉える。ブラジル社会では家族を大切にし、「家と外」を区別し、有力者との関係を築いてきた<sup>(注6)</sup>。上江洲Mの事例でも、沖縄で生まれた長女や二世の次女はブラジルでそれぞれに有力者のマドリーニャ (カトリック教上の代母) をもった。また、二世の三男も有力者のパドリーニョ (カトリック教上の代父) をもっていた。代父・代母は、学校への入学時などに便宜をはかり、誕生日や結婚式といった人生の節目のハレの行事において経済的・社会的に支援することが責務と考えられている。有力者である代父・代母にとって多くの代子をもつことは社会的ステータスの象徴である。代子は成長し、社会的上昇を果たした暁には、代父・代母を支援する側にまわるこ

となる。このようなブラジル社会の人的ネットワークの中で生活した経験を来日者・来沖者はもっていたことになる。

また、来日者・来沖者の言語環境について若干触れておく。彼らはブラジルにおいても、来日・来沖後も多言語環境下にあったといえる。就学年齢のときに沖縄からブラジルに移住したウチナーンチュ系人は、家庭ではウチナーグチ（沖縄語）を話し、ブラジルの学校や「外」の社会ではポルトガル語を使っていた。少数ではあるが、ブラジルで同時に日本語学校に通っていた者もいる。ブラジルで生まれた二世も来日・来沖後はウチナーグチを話すことができるほど習得するケースもある。

## 2. 本土のウチナーンチュ系ブラジル人

それでは、本研究の中心的対象であるブラジルに帰らなかったウチナーンチュ系ブラジル人の事例をみていこう。その多くはブラジルに帰らなかったのではなく、帰ることができなかったという表現が正しいのかも知れない。ブラジルでは、親に経済的に依存し、自立していなかったことが最大の要因であると高安Yは証言している。新里Gの三男Yが親の来日決定に抗議して一時的に家出したが、いずれもブラジルで生活する術を持っておらず、最終的には親に従って来日した。つまり、ほとんどの者が親との生活を選択したのである。

ブラジルから来日して既述の関西地域に居をかまえた理由は様々である。新里Shの次男Yによると、亡き父Shは沖縄を出て親類のいる尼崎市に来る予定だった。しかし、当時の沖縄県大里村では南米移住者が多かったことから、その波に乗って1961年にボリビアのオキナワ第二移住地に入植した（屋比久 1987b:67-69, 移民史刊行委員会 2000:223-225）。その数年後、生活が立ちゆかなくなり、夜逃げ同然に知り合いを頼ってブラジルに転住したが、最終的には日本に骨をうずめたいという希望が

あって1970年初頭には親類を頼って尼崎市に辿り着いた。他には、戦前、沖縄県から尼崎市に出稼ぎに来た経験から、ブラジルから来日した際、馴染みのある場所に定住したという例もある。また、なかには先に来日した知人を頼って関西に来た者もいる。つまり、1970年半ばごろ以降ブラジルから関西地域への移住は、チェーン・マイグレーションの様相を呈していることがわかった。ブラジルでの知り合いが先に移住してきた場所を頼りに連鎖的に移住者がやってきた。

このような事情で関西地域に来日した思春期の子どもたちは、移住の過程で作り上げたネットワークを介在してコミュニティを形成した。相互扶助組織の頼母子講を組織し、サント・アンドレFC (Santo André) と名づけたサッカー・チームを結成し、娯楽・ドライブ・海水浴・ピクニックを企画・実施するようになった<sup>(注7)</sup>。来日当時の共通言語はポルトガル語だったが、同時に家庭では、親や親類とのコミュニケーションに使うウチナーグチを獲得していった。ブラジルでもウチナーグチを聞き取ることが出来たが、使うことはなかったものの、社会環境の変化によって「自然」にウチナーグチを自ら使うようになったのだ。

また、来日当初、日本語がほとんど話せなかった来日者は、昼は職場で、夜間は中学校や高校（普通科や工業科）に通学するようになって日本語も獲得していった。その結果、コミュニティ内でもポルトガル語の使用頻度が低下し、それに反比例して日本語の比重が増大した。コミュニケーションの手段として日本語がポルトガル語を凌駕するのは来日から10年以上経過してからである。それは後に述べるように、ホスト社会成員に自己紹介するとき、「〈ブラジルから来た〉○○です」と言っていたのが、敢えて「ブラジルから来た」を付ける必要がなくなった時期と重なる。

かれらの証言によれば、ブラジルに帰らず、日本で生活して適応して

いった要因としては、既述のネットワークを介在してのコミュニティの存在が大きかった。このコミュニティは同胞意識を育み、ストレスの多い異文化社会において精神的な支えとなる役割を担い、日本での社会適応に大きく貢献した。また、それはブラジルを介在しての沖縄的心性の継承をも担った。

このような彼らを取りまく多文化の混淆状況を端的に表象しているのが、ハレの行事である正月の料理である。誰が指示したわけでもないが、コミュニティ・メンバーの家へ年始回りをすると、類似した料理の組み合わせになっているのだ。来日から10年後ころにはブラジルでは決して見られなかったトゥンダーブン（東道盆）に、沖縄食とブラジル食がおせち料理として盛りつけられるようになった<sup>(註8)</sup>。2011年の正月ではトゥンダーブンは姿を消したが、料理は一層混淆している。正月の食卓に上がるのは、パステウ（ブラジル風揚げ餃子）、コシーニャ（ブラジル風コロッケ）、サラミ、揚げチーズ、ブラジル風サラダ（オリーブ油・塩・レモンのドレッシングをかけた生野菜）、オリーブの実といったブラジル料理に、沖縄におけるハレの料理の定番のクーブ・ンムブサー（昆布・蒟蒻・三枚肉の煮炒め）、ソバー（沖縄ソバ）、中身汁（豚の内臓のスープ）、ミミガー、サーターアンダーギーといった沖縄料理の混在である。さらに、本土のおせち料理につきものであるかまぼこ等も登場することがある。

写真は、2011年、上江洲M家の正月料理である。

ブラジルでは、ケの食としての位置づけにあるブラジル料理は、日常生活で食するものの、決してハレの行事には用いるこ





とはなかった。日本では、ブラジル料理の社会的位置づけが変化し、ウチナンチュ系ブラジル人の生活文化の前面に登場した。ブラジルでも食していた沖縄料理に関しては変化はあまりないが、これと同等な価値を付与されたブラジル食が来日によって加わり、ハレの行事にはいずれの料理も欠かせないものになった。

トートーメー（位牌）と沖縄で呼ばれる仏壇も家庭によっては沖縄的なモチーフと日本の仏壇の折衷となっている。このトートーメーに供物として上げられるものにも正月料理として作られた沖縄食とブラジル食の皿が混在する。

前述の高安Yは、トートーメーを継いだ。Yは、「士族の子孫であり、沖縄にムンチュウ（門中）の大きな亀甲墓がある。親族が墓参りしない時期に先祖の供養に行った」と証言する。また、その理由は、「価値観が異なり、沖縄的形式云々と言われるのは煩わしい」と考えているからだ。ブラジルで身につけたカトリック的な祈り方について批難されたり、ウガン（御願）の形式に則るよう指示されることを避けるためである<sup>(注9)</sup>。

Yは前述のサント・アンドレFCの設立メンバーの一人である。サント・アンドレとは大サンパウロ都市圏を形成する都市の一つであり、ほとんどの来日者が同市出身者であったため、チームに市名を付した。Yの証言によると来日者は試合の前に、日向でジュースを飲んだり、煙草を吸ったりしてリラックスしていたのとは対照的に、日本人チームの選手はウォーミング・アップや準備体操をしていた。「不真面目で『ヘンな』人々に見えたに違いないが、当時は日本サッカーのレベルがまだ低かったから日本人チームに勝つことが多々あり、相手チームには怪訝な態度をとる者もいた」とYは証言する。1980年代後半には多くの来日者がチームを離れ、徐々に関西の日本人サッカー愛好者によって受け継がれ、設立当初のメンバーは数名が残るのみとなった。その後、2002

年にかつての来日者を中心とするシニア・サッカーチーム・パウリスタ (paulista サンパウロ州出身者の意味) を結成した。

関西の来日者の多くは、コミュニティ内婚によって家庭を築くか、関西在住の沖縄県人または沖縄県の親類による紹介で同県人と結婚しているケースが圧倒的に多い。他県人または外国人との結婚は数例にとどまっている<sup>(注10)</sup>。この点は、後に詳述する沖縄のケースと著しく異なる。

現在、来日者の生活全体は「現地化」しており、習慣などの生活文化は子どもには受け継がれていない。

### 3. 沖縄のウチナンチュ系ブラジル人<sup>(注11)</sup>

沖縄の場合も関西同様、ウチナンチュ系ブラジル人に限らずウチナンチュ系アルゼンチン人やウチナンチュ系ペルー人の青年たちがネットワークによってコミュニティ（最大時には百名にも上るメンバーがいたという）を形成していた。来沖後、4～5年間は密接に連絡を取り合い、ドライブ・海水浴・ピクニックなどの企画・実施をしていた点も、関西のコミュニティと同様である。10年ほどして徐々に集まらなくなったという点も関西と共通している。

関西と大きく異なる点は、来沖者は男女ともに沖縄県人との婚姻率が高く、南米から来た男女同士のコミュニティ内婚姻数が2～3組にとどまっている点である。来沖者女性のほとんどが沖縄の男性と結婚し、夫の親類縁者との関係も順調に築きながら、一方では南米から来たウチナンチュ系人とのネットワークを維持している。しかし、沖縄の男性と結婚して定住するに至った道は平坦ではなかったようである。嘉数Kの証言からその過程を紐解いてみたい。

嘉数Kは、両親と妹二人とともに沖縄からポリビアに移住した後、父が死亡したため、知人を頼ってブラジルに転住した。その後、1972年に

母、妹二人と一緒に22歳で来沖した。

Kは、自らの体験を語るなかで、沖縄の男性との結婚にあたって夫から「〈あなたはブラジルで育ったために率直すぎる。私と結婚するには、ブラジルのやり方を捨て本音と建て前をもつ日本人のように慎むようにしてください〉という条件を突きつけられた」と証言している。このような、それまで築いてきたアイデンティティの否定、および沖縄的価値観の獲得による沖縄社会への同化の強要をされた経験は、Kにとどまらず、多くの来沖女性に共通しているように見受けられる。Kは、来沖して40年近く過ぎた現在、そのような自らの過去を振り返り、ライフヒストリーを客観的に語るできるようになった。それを可能にしたのは、3人の子どもたちがいずれも大学進学を果たして、親としての努めを十分に果たしたという自信だろう。Kは長女に対しては幼いころからポルトガル語で話しかけるようにしていた。そのため、長女はポルトガル語を聞き取ることができるようになったという。また、大学に進学した長女に対して、ポルトガル語に近い言語であるラテン語を勉強するように頼んだともいう。それだけ、自分のバックグラウンドであるブラジルのなにかを受け継いでほしいという意志をもっているということだろう。

しかし、K以外の事例では、生活文化レベルでも子孫へのブラジル文化継承はほとんどない。その理由には大きく分けて二つあると考えられる。一つは、沖縄社会に適応するために「一旦過去を忘れる」必要があったことである。Kの証言によると、「コミュニティが日本の悪口を言うハケ口になっており、この中にいたら現地になじめない、ということに気がついて、コミュニティから距離を置くようになった」という。もう一つは、ホスト社会成員から「ヘン」な人たちだと指摘され、その価値観を自らも内面化して、その「ヘンで沖縄の人とは違う点」を隠そうとしたということである。この点は、来日者も同様である。本土の事

例で紹介した高安Yの証言にみられるとおり、「ヘンだ」と指摘される前に自ら「ブラジルから来た」という予防線を張るのも、背後には同じ意識がある。

しかし、本土とは異なる点が数々ある。1970年代の沖縄県は生活基盤をはじめ、文化的にも「本土との一体化」がはじまったばかりであった（多田 2004:36, 37）。そもそも沖縄社会は、シマ（部落）によっても違うウチナーグチと標準語が平行して存在する多言語状況にあった。さらに、米軍占領期においては、英語（外国語）を話す人たちと日常的に接する環境が長く続いた。Kの証言によると、「沖縄は外国人が多い。『ヘン』な日本語を使っても大丈夫。時間を厳守する本土とは違うテーゲー主義な社会であり、私たちにとってなれやすい環境だった」。つまり、標準語を流ちょうに話せないことは、沖縄社会では本土ほどネガティブな意味をもっていなかった。このような沖縄社会で、来沖者がウチナーグチを話すことができたことは、有利になることはあっても不利になることはなかったといえる。

さらに、来沖者の安里S（女性）の義理の父（伝統的に地域の有力者）がペルーに移住した経験をもつ人であったことからわかるように、沖縄社会は移動性が高く、外国への行き来は特別なことではなく、ごく一般的で身近な現実として考えられ、異質な者に対して寛容な社会となっている。

ところで、来日時筆者と同船者であるAT（男性）によると、来沖者は世代ごと（約10年ごと）のグループにわかれるという。沖縄県には、少数ながらも継続してブラジルから来沖する流れがある。ブラジルから1972年以前に来沖したのは120世帯、1972年以降は200世帯となっており、合計で約1500人（2005年現在）にのぼるという。彼らはブラジル出身者という共通点はもちつつも、世代間で異なる文化をもつ者として認め

合っている。彼らは多文化に対する寛容性に基づいて異なる文化をもつ人々であっても沖繩社会の一員として考える土台をもっている。戦前期から移民が盛んでハワイや北南米に渡ったウチナンチュが故郷に大金を送金してきているのを知っている沖繩の人々は、ブラジルが後進的だとも思っていない。こうした環境は、戦前期に沖繩からの移民に対する差別的扱いをした歴史をもつ関西とは著しく異なる。

#### 4. 多層的スタンダードの形成と社会適応

調査から明らかになったことは、来沖ウチナンチュ系人あるいは来日ウチナンチュ系人のいずれも、沖繩や日本本土といったホスト社会への適応は、個人がブラジルで獲得した価値観を全面的に否定せず、来日・来沖後にホスト社会の価値体系をも内面化し、二つ以上の価値観を併存できるようになった時点で完成するということである。いわゆる異文化や異質な社会への適応は、初期の観光客的・傍観者的な立場から、場合によっては自己否定または他者否定をせずにいられない葛藤や対立の苦悩の時期を経て、最終的な段階へとすすむ。この最終的な段階において、多層的スタンダードが形成されることによって社会適応が完了するといえるだろう。

では、この理論的流れの具体的なプロセスを紹介していきたい。既述のように来日者も来沖者も、ブラジルからの来日・来沖間もないころは、毎週のように週末には共に行動し、若者としてのレジャーを楽しんだ。何人かが車を買うと、一緒に海水浴に行き、ドライブなどを楽しむ。夜は友人宅に集い、仲間同士で町に繰り出す。それは、ホスト社会において自らの居場所を模索し、存在意義を確かめる行為でもある。来日・来沖することにより、ブラジルで形成していたアイデンティティとホスト社会の間での葛藤が起り、対抗アイデンティティ形成をせざるをえな

くなる。この葛藤から脱するのに、少なくとも10年はかかるのが通常の事例のようだ。

既述の関西の高安Yの事例はこのことを見事に表現している。Yは「日本に来た最初のころ、自己紹介するとき、ブラジルから来た〇〇です」と言っていた。「そう言えば、いつごろから、『ブラジルから来た』というフレーズを使わなくなったのかな」と自問している。

来日・来沖者は、形質的にはウチナーンチュ系人であり、目鼻立ちがはっきりした顔立ちであり、名字は沖縄ではありふれたもので、名前も恵子、洋子といった日本ではごく一般的なものである。しかし、行動規範、表情、ジェスチャー、服装、食べ方、生活の細部に至るマナーや価値観は異なる。しかも最も重要な意思疎通の手段である日本語が来日・来沖時にはほとんどできなかった。ホスト社会の日本人から見るとこのような人々は奇妙な者に見え、逆に来日・来沖者にはホスト社会成員は異質な者にうつる。相互に異質な者同士として意識する間は、「ブラジルから来た〇〇です」と自己紹介せざるを得ない。そうすることによってホスト社会成員に理解してもらえるのである。つまり、お互い異質な人間として距離を置いた関係になる。ホスト社会に対抗するように何かと来日・来沖者で集まって、仲間同士で行動することによって自らの存在意義を確認する必要があったといえるだろう。

ところが、日本語が上達し、日本的価値観を身につけ、一見日本人が考える「日本人」として行動できるようになると、もはや「ブラジルから来た」という表現は不必要になる。これには来日・来沖から10年以上はかかっている。調査からわかったことは、来日者は、働きながら夜間中学を終え、夜間高校に進学し卒業してから徐々に日本人の友人ができたということだ。同時に職場の同僚との付き合いが深化する。それは、来日した者同士のネットワークによるコミュニティの形成・維持と平行

して起こる。既述した来日者同士の社会的ネットワークを維持しながら、新たに形成したホスト社会成員との関係は、日本社会の価値観を内面化してきたことを意味する。こうしたプロセスが多層的スタンダード＝価値体系の形成である。

それは、彼らの日常的なユーモアのセンスの違いにも現れている。例えば、ブラジルでは特定のエスニック集団に関するステレオタイプを取り沙汰したエスニック・ジョークが日常的に飛び交う<sup>(註12)</sup>。これは、日本人の感覚からすると差別的なブラック・ジョークに聞こえて、笑えないことも少なくない。ウチナンチュ系人たちのユーモアのセンスはきわめて「ブラジルの」である。

沖縄中部で生活するブラジル生まれの二世大嶺M（男性）は、ブラジルにいる親類とはポルトガル語で話す。そのときの感覚や価値観はブラジルのものとなるようである。このようにプライベートではポルトガル語のコミュニケーションを楽しんでいる。他方、沖縄の会社の仲間と日本語で話すときは、日本的ジェスチャーや価値観になる。Mは二つの価値体系に矛盾を感じることなく、使い分けができるようになった。二世の妻と結婚したこともあり、日常生活においてもブラジル料理は欠かせないものになっているが、沖縄料理と共存している。

このように、相反し矛盾する価値観を内面化し、日本や沖縄社会においては、日本的・沖縄的な価値基準を尊重し、ウチナンチュ系ブラジル人の集う社会的場面においてはブラジルで獲得した価値体系を優先するというような使い分けができるようになって、初めて精神的健全性が維持できるかたちで社会適応できるのではないだろうか。このような多層的スタンダード形成には10年以上かかるのが一般的だが、個人差は見受けられる。徳上江洲家の成員のなかには20年以上ブラジル・沖縄・日本の間を移動して自らの価値体系のあるべき姿を模索しているケースも

見られる。適応に要する年月の差は、ホスト社会へのコミットの度合いに大きく左右されるものと考えられる。ホスト社会で生活していく上で、の動機、意味づけ、言語獲得およびホスト社会での文化獲得の状況、地域社会や職場の人々との関係のあり方、ホスト社会の特徴などの違いによるところが大きいものと考えられる<sup>(注13)</sup>。

他方、ブラジルで形成した生活文化は来日者自身の間では継承されているものの、次の二世代目からは途絶えている。来日・来沖者の子ども(第二世代)は、年長者は30歳代になり、年少者は中学校修学年齢に達している。多くの来日・来沖者はこの二世代目の子どもにブラジルの生活文化を伝授していない。調査によると、ポルトガル語をおしえていないだけでなく、ブラジルでの自らの体験や生活についても伝えていない。その結果、来日者の子孫にはブラジルに対する関心はほとんど育まれていない。これに対して、多文化に触れる機会の多い来沖者の子孫のなかには関心を示す者はいる。

### おわりに

来日・来沖後約40年経た現在、調査を基に本稿で明らかにできたのは、彼らの人生経験のなかから集合的に形成された新しいアイデンティティが、ブラジルで獲得した価値観に基づくアイデンティティを放棄することなく、来日・来沖後のアイデンティティの葛藤の末、10年以上を経て、多層的スタンダードを形成することによって育まれているプロセスである。二つ以上の社会の価値観と行動様式を併存でき、身体化することによって、日本本土または沖縄社会に統合されたプロセスということもできよう。その過程が苦難に満ちていたことは既述の通りである。

もっとも、関西と沖縄の相違点も明らかになってきた。関西の場合は、来日者のホスト社会への統合過程で日本語の壁が立ちはだかった。しか



もブラジルではほとんど耳にしたことがない関西方言という壁であった。そのため、彼らはネットワークによるコミュニティを形成した。コンタクト・ゾーン（接触領域）ともいうべき接点（労働の場、サッカーの試合など）を通してホスト社会成員と関係をもつ以外は、コミュニティで完結する社会集団となった。異質な部外者が入りにくい日本社会で生活していくために、自らが小社会を形成したということである。その点は筆者が別の論考で考察したコミュニティ内婚姻（ウチナンチュ系人同士）の比率が高いところに反映されている。

関西とは異なり、沖縄の場合は、米軍統治が長く、しかも出入移住者の流動性の高い社会であるだけでなく、様々なシマ（部落）の言語や外国語が飛び交い、多言語・多文化状況の社会であるため、ホスト社会に溶け込むのに言語や文化の壁は相対的に低かった。日本語がほとんどできなかった来沖者は、ウチナーグチでそのハンデをカバーできた。この点は、関西のケースとの大きな違いであろう。

関西と沖縄に定住したウチナンチュ系人を比較すると、それぞれのホスト社会の違いが、子どもたちの社会上昇の差にもつながっているようだ。関西では高等学校や専門学校卒業者が多いのに対し、沖縄では高等教育を受ける者が多くみられる。それだけ、それぞれの社会統合のあり方が違ったということの意味するのだろう。

最後になったが、1990年代から、ブラジルをはじめ、ラテンアメリカ諸国から33万人を超える日系人が就労目的で来日して、現在はこういった日系人ニューカマーの定住化が進んでいる。本研究がこのようなニューカマーの社会的適応の一助になれば幸甚に思う。

謝辞：

沖縄県での調査は沖縄ブラジル友好協会の安谷屋隼裕氏の惜しみない

協力で実施が可能になった。心より感謝申し上げたい。

また、本調査は文教大学大学院附属言語文化研究所の平成22年度給費研究の受託により実施した。

[注]

- 注1 本稿でいうウチナンチュ系ブラジル人とは、子どものころ沖縄からブラジルに移住し、ブラジルで社会化の過程を一定程度経たいわゆる準二世と呼ばれる者、または沖縄県人移住者を親にもつブラジル生まれの二世を指す。
- 注2 1993年から1994年の調査の成果の一部は（田島 1998）、（Tajima 1999）の論考で発表しているので参照されたい。
- 注3 阪神地区への沖縄人移住は戦前から盛んであったことは豊見山和行・高良倉吉が指摘している（豊見山・高良 2005：145）。
- 注4 フェイラ・リーブレ、またはフェイラについては文化人類学者の森幸一が（森 1999：65-66）で詳細に述べている。沖縄県出身者のフェイラおよび職業変遷に関しては琉球大学の研究グループが一連の調査・研究を行っている（島袋・米盛 1982）、（島袋・米盛 1989）（石川 1989）（移民史刊行委員会 2000：226-227）。ただし、島袋・米盛・石川の研究のポルトガル語表記、ポルトガル語からの日本語訳表記は正確性に欠けるところがある（例えば（石川 1989：3）に表記されているサンパウロ市の地区名としてカーザルデ、ビーカロンといった地名は同市には存在しない。これはおそらく Casa Verdeカーザ・ヴェルデやピーラ・カロン Vila Carrão のことだろうと推察される）。しかしそのことは、研究の価値の低下を意味するものではなく、内容は示唆的な点が多い。

ブラジルにおける沖縄県系人も含めた日系人の生業変遷については（Makabe 1999）が参考になる。

- 注5 1970年代初頭に来日したウチナンチュ系ブラジル人の家族構成や婚姻ネットワークについては（田島 1998）の論考を参照されたい。
- 注6 ブラジル社会で広く共有されている認識として「家と外」の乖離については、20世紀初頭から多くの研究者が指摘するところであるが、調査により実証したのが社会人類学者ダマッタ（DaMatta, Roberto）である（DaMatta 1997）。
- 注7 沖縄では頼母子講、模合、ユイともいう。頼母子講は、沖縄のみならず、日本でも広く活用された相互扶助制度であり、移住先ブラジルでも日系人の間で普及していた。ブラジルの日系人の頼母子講についてはマカベ・トモコも日系人の農業生産における独占的な役割に関する研究のなかで触れている（Makabe 1999：713, 721）。
- 注8 沖縄料理については、松本嘉代子の料理本がわかりやすく特徴を紹介しており、トゥンダーブンの写真も掲載されている（松本 2006）。
- 注9 ウガン（御願）の形式については、（新城 2006）などの沖縄の習慣に関するハンドブックで紹介されている。また、門中については（渡辺 1985：121-130、2004：66-131）、（赤嶺 2003）を参照のこと。
- 注10 関西のウチナンチュ系ブラジル人の婚姻パターンの詳細については、前掲論考（田島 1998）を参照されたい。
- 注11 来沖者へは2010年8月下旬に15人（うち女性12人、男性3人）を対象にインタビュー調査を行った。調査対象者には、筆者が来日

した時の同船者が3人含まれている。

注12 ブラジルではジョークはピアダ (piada) と呼ばれ、数多くのピアダ集が出版されるほど題材は豊富である。もっとも多いのは、ポルトガル人に関するエスニック・ジョークや、バイアーノ (北東部出身の田舎者の代表)、黒人、オウム (セクシュアリティに関する卑猥な内容)、結婚、子ども (悪ガキ)、戦争を題材にしたものである。つづいてインディオ (先住民)、トルコ人 (実際はレバノン人、シリア人)、ユダヤ人、ドイツ人、ジャポネース (japonês 日本人)、ロシア人、アメリカ人など、多岐にわたる内容となっている。サフモール (Sarrumor, Laert) のジョーク集以外に、地方では数多くのピアダ集が簡易製本のかたちで街角のキオスクで売られている。また、ブラジルでは全国隅々を走るトラックの後部バンパーにはたいてい運転手の思いが教訓的ジョークとして書き記されている。こういったジョークの大半は、姑に対する不満であり、韻を踏んだ詩的な表現がされ、ブラジル人なら誰でも笑ってしまうものが多く、トラックの後ろを走っていると緊張感が解れる。現在はインターネット上に「トラックの後部バンパーの思い」 (frases do parachoque) のサイトが数多く見られる。

ブラジルでは、小中学生から大人まで、人々は毎日ピアダを連発する。社会的な緊張を緩和する役割も果たし、真剣な会合の合間にジョークを披露することもしばしばある。ピアダの腕前次第で、その人物に対する印象がかわる。ブラジル社会でピアダは重要な機能を果たすため、筆者もブラジルで生活していたときには、ジャポネースのジョークを自ら披露し、相手から別のバージョンのジャポネース・ジョークをしばしば教わった。現在もブラジル

を訪れるときには、エスニック・ジョークで社会的場の空気をなごませることがある。つまり、ピアダはコミュニケーションの潤滑油的役割を果たす。

注13 沖縄や日本といったホスト社会の違いとウチナンチュ系人の社会適応については（田島 2007）を参照されたい。

#### [引用文献（日本語）]

- 赤嶺政信 2003 『沖縄の神と食の文化』 青春出版社。
- 石川友紀 1989 「ブラジルにおける日本移民と地域的分布と職業構造の変遷—第二次世界大戦前を中心に—」『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』 第32号、1-56ページ。
- 1997 「南米における沖縄県移民の特色—食文化の維持と変容—」『第26回 沖縄県学校給食研究協議会 報告書（特別講演）』、7-12ページ。
- 勝方 = 稲福恵子・前嵩西一馬編 2010 『沖縄学入門—空腹の作法—』 昭和堂
- 島袋伸三・米盛徳一 1982 「ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷—農業を中心に—」『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』 第25号、57-122ページ。
- 島袋伸三・米盛徳一 1989 「サンパウロ大都市圏におけるフェイラと沖縄県出身のフェイランテ」『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』 第32号、89-103ページ。
- 田島久歳 1998 「関西の沖縄系ブラジル人のエスニック・コミュニティ—婚姻ネットワークを通して見るその形成と維持—」『移民研究年報』 第4号、日本移民学会、76-91ページ。
- 2007 「本土社会と沖縄社会の包摂原理の違い—ウチナン

- チュ系人と日系人の事例による検証—』『沖縄社会と日系人・外国人・アメリカン —新たな出会いとつながりをめざして—』（安藤由美・鈴木規之・野入直美編）クバプロ、161-176ページ。
- 多田治 2004 『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラル・スタディーズ—』東洋経済新報社。
- 豊城山和行・高良創吉編 2005 『琉球・沖縄と海上の道』吉川弘文館
- 松本嘉代子 2006 『沖縄の行事料理』沖縄文化社。
- 森幸一 1999 「〈食〉をめぐる移民史—（2）—戦前・戦後の都市における食生活」『人文研』第3号、サンパウロ人文科学研究所、64-102ページ。
- 渡辺欣雄 1985 『沖縄の社会組織と世界観』新泉社。
- 2004 『民俗知識論の課題：沖縄の知識人類学』（第二版第一刷）凱風社。

[引用文献（洋語）]

- DaMatta, Roberto 1997 *A casa e a rua: espaço, cidadania, mulher e morte no Brasil*, Editora ROCCO Ltda., 5ª edição, Rio de Janeiro.
- Makabe, Tomoko 1999 "Ethnic hegemony: The Japanese Brazilians in agriculture, 1908-1968", in *Ethnic and Racial Studies*, Vol.22, Number 4, July 1999, pp.702-723.
- Sarrumor, Laert 1998 *Mil piadas do Brasil*, Nova Alexandria, São Paulo.
- 1999 *Mais mil piadas do Brasil*, Nova Alexandria, São Paulo.
- Tajima, Hisatoshi 1999 "Socio-Cultural Differentiation in the Formation of Ethnic Identity and Integration into Japanese Society: The Case of Okinawan and Nikkei Brazilian Immigrants",

in *Regionalism and Immigration in the Context of European Integration*, pp.187-197, (MIYAJIMA Takashi, KAJITA Takamichi and YAMADA Mutsuo, eds.), JCAS Symposium Series 8, The Japan Center for Area Studies-National Museum of Ethnology, Osaka.

[在ブラジル・ウチナーンチュ系関係資料]

移民史刊行委員会 2000 『ブラジル沖縄移民史 笠戸丸から90年』 ブラジル沖縄県人会。

屋比久孟清 1987a 『ブラジル沖縄移民名簿』 在伯沖縄県人会。

屋比久孟清 1987b 『ブラジル沖縄移民誌』 在伯沖縄県人会。